

100 人の寄るところ鳥寄る雪解風 田中裕明 (『夜の客人』)  
99 仰臥して冬木のごとくひとりなり 田中裕明 (『田中裕明全句集』)  
98 初雀鈴の如きが七八羽 西村麒麟 (『鳴』)  
97 大白を運び入れたる冬景色 石田郷子 (『草の王』)  
96 ところどころ外れてみたる枝の雪 岩田由美 (『雲なつかし』)  
95 てのひらに影をのせたる冬桜 市川薫子 (『たう』)  
94 水仙を剪れば水音ついてきし 小関菜都子  
93 月祀るいつか地球も祀らむか 白石正人 (『囀』)  
92 団栗のごりごり廻る洗濯機 後閑達雄 (『母の手』)  
91 ながいぼしそれをながびかせることば 福田若之 (『自生地』)  
90 草の花散り敷くといふことのあり 石田郷子 (『椋』73号)  
89 あをぞらの途中に鳥瓜ふたつ 樺未知子 (『カムイ』)  
88 山夕立指そよがせて開き入りぬ 中村草田男  
87 ほととぎすすでに遺児めく二人子よ 石田波郷 (『惜命』)  
86 金雀枝や基督に抱かると思へ 石田波郷 (『雨覆』)  
85 木洩日のいちめんは蟻見えてきし 石田郷子 (『椋』71号)  
84 花も亦月を照らしてをりにけり 今井肖子 (『花もまた』)  
83 影のあるひとりひとりや桜の夜 下坂速穂 (『なんぢや』36号)  
82 つかみたる雛に芯のありて春 正木ゆう子 (『羽羽』)  
81 ちらちらと陽炎立ちぬ猫の塚 夏目漱石  
80 御僧や雪解の風のごとく過ぎ 石田郷子 (『草の王』)  
79 冬萌やいつも誰かが開くる窓 小関菜都子 (ブログ「週刊俳句」508号)  
78 初鶉の真白にをりし四五羽かな 石田いづみ (『白コスモス』)  
77 祝はれてをり凍草の王のごと 石田郷子 (『椋』68号)  
76 ねむるため身をはたらかす十二月 田中裕明 (『夜の客人』)  
75 明日行かな深志の城は雲晴れて飛弾の山なみ白くあれかし (松本城)  
みどかやと (『国立小曲』)  
74 雪折れのままに雪へと沈みたる 小関菜都子 (『角川』11月号)  
73 鳥が葉を落としてゆけり秋の山 対中いづみ (『巢箱』以後)  
72 穴惑亡き人に弟子入志願 田中裕明 (『夜の客人』)  
71 頭上来的鳶悪相ぞ秋の風 谷地由紀子 (『新しく』)  
70 桔梗の映りて黒き公用車 石田郷子 (『俳句』2016年9月号)  
69 秋いまだ大緑蔭と申すべく 田中裕明 (『先生から手紙』)  
68 黒揚羽ときをり影と入れ替り 上田りん (『頬杖』)  
67 文くれて草かげろふのごとく病む (『夜の客人』)  
66 龍あるく青水無月の原濡れて 田中裕明 (『夜の客人』)  
65 蓮を見る詩人のまるき食卓よ 田中裕明 (『先生から手紙』)  
64 口笛や沈む木に蝸蚪のりてみし 田中裕明 (『山信』)  
63 一人だけ子を連れてゆく麦の秋 田中裕明 (『先生から手紙』)  
62 昔より竹林夏の一返信 田中裕明 (『花間一壺』)  
61 さびしいぞ八十八夜の踏切は 田中裕明 (『夜の客人』)  
60 けがの子をはげましてみる櫻かな 田中裕明 (『夜の客人』)  
59 この世でもつとも小さき花に涅槃西風 田中裕明 (『先生から手紙』)  
58 この地球よりチューリップの芽が大事 田中裕明 (『先生から手紙』)  
57 春の雪波の如くに壱をこゆ 高野素十  
56 浅春の岸辺は龍の匂ひせる 対中いづみ  
55 小さき葉もちさきつらゝや皆つらゝ 高木晴子  
54 何の芽か早や元日の土を割る 村上鞆彦

53 まづ片目より鼻の眠くなる 山田弘子  
52 扉のひらくたびに白雲十二月 友岡子郷 (『日の径』)  
51 短日の羽虫あつまる小菊かな 田中幸音 (『花風』)  
⑤ふたつづつ菌のならび冬に入る 田中裕明 (『夜の客人』)  
④秋草の猛々しさを諾へり 石田郷子 (『木の名前』)  
④さびしいからこほろぎはまたはじめから 清水径子 (『清水径子全句集』)  
④塩振つて飯かがやきぬ十三夜 石田郷子 (『草の王』)  
④どんぐりを拾つて振つて捨てにけり 矢野玲奈 (『森をはなれて』)  
④露なめて白猫いよよ白くなる 能村登四郎 (『易水』)  
④玄関を大きくあけて盆用意 小林すみれ (『星のなまへ』)  
④眼球に触れたる鳥揚羽かな 藤井あかり (『封緘』)  
④空蟬をもとのところに戻せざる 藤井あかり (『封緘』)  
④指先の蟻大空を感じみる 村上鞆彦 (『遅日の岸』)  
④日本は水に浮く國梅雨に入る 田中裕明 (『先生から手紙』)  
③風鈴をつるすこはい処にだけ 冬野虹 (『冬野虹作品集Ⅰ・雪予報』)  
③粽解く葎の葉ずれの音させて 長谷川耀  
③蝶々の頭下げつつ向ひ風 岸本尚毅 (『小』)  
③蹴ちらして落花とあがる雀かな 川端茅舎 (『川端茅舎句集』)  
③石踏みて汐のにじみし干潟かな 深見けん二  
③雲に掻き傷竜天に登りしか ふけとしこ (『インコに肩を』)  
③鴨のむかう向きなる梅の花 星野立子  
③日當りて花新しき椿かな 清崎敏郎 (『東葛飾』)  
③大寒や転びて諸手つく悲しさ 西東三鬼 (『夜の桃』)  
③十羽みて同じ黒瞳や初雀 友岡子郷  
③湯気立てて大勢とみるやうに居り 岡本眸 (『知己』)  
③冷たさの詰まつてをりし林檎かな 加藤喜代子 (『霜天』)  
③めぐりては水にをさまる百合鷗 石田郷子 (『木の名前』)  
③白鳥の降り来て強き波ひとつ 平井岳人  
③水澄むや背伸びしなくてよいひとと 岡村潤一  
③秋冷に啼ける仔牛に手を吸はず 鈴木牛後 (『暖色』)  
③椎拾ふ一掬の風手のひらに 川端茅舎 (『華嚴』)  
③秋草の揺れの移れる体かな 涼野海音 (『一番線』)  
③流れきものに触れゆく蜻蛉かな 石田郷子 (『椋』0号)  
③潦みな色違ふ避暑地かな 森田峠 (『避暑散歩』)  
③いつからの一匹なるや水馬 右城暮石 (『上下』)  
③捕虫網持たせておけば歩く子よ 後藤比奈夫 (『金泥』)  
③さみしきの押し寄せてくるゼリーかな 川島葵 (『草に花』)  
③尚深く流るゝ早苗ありにけり 岡田歌陽 (『ホトトギス雑詠選集』)  
③溝浚へすみて雀のおりてくる 榎本享 (『おはやう』)  
③亀の子のすつかり浮いてから泳ぐ 高田正子 (『花実』)  
③ぬかるみのあれば吸ひつく落花かな 岸本尚毅 (『健啖』)  
③のりだして子も花びらを受けにけり 高田正子 (『玩具』)  
③みづうみの鴨引くことのひそかなり 田中裕明 (『先生から手紙』)  
③鶉の声透る楓の雪霽 飯田龍太 (『春の道』)  
③鳥の糞浴びたる枯木かがやける 榮猿丸 (『点滅』)  
③雪吊や旅信を書くに水二滴 宇佐美魚目 (『天地存問』)  
③根雪と記し農作業日誌閉づ 鈴木牛後 (『根雪と記す』)  
③口開けて眼とづれひま吸入器 岩田由美 (『花束』)

⑤へろへろとワントンすするクリスマス 秋元不死男 (『瘤』)

④鉤屑向かうへ払ふ小春かな 星野蘭 (『木の家』)

③林檎割る何に醒めたる色ならむ 高柳克弘 (『未踏』)

②日の丸の余白に秋の日のひかり 西原天気 (『けむり』)

① 秋海棠といふ名も母に教はりし 石田郷子 (『秋の顔』)